



～戮力協心～ NO.36 その1

2024年6月6日
発行責任者 池尻 和寛
編集責任者 情 宣 部

復帰52年！5. 15沖縄平和研修

5月17日～19日にかけて、JR貨物労組青年部は「復帰52年！5. 15沖縄平和研修」を開催し、全国から12名が参加しました。本来であれば「5. 15沖縄平和行進」として、現地で行なわれる平和行進と県民大会に参加し、共に平和を訴える予定でしたが、昨年同様、沖縄平和運動センターに加盟している団体のみで実施することから、平和研修に切り替えることとしました。

一般市民を巻き込んだ地上戦を経験し、日米合わせて約24万人もの命が失われた沖縄の地は、現在日米両政府主導のもと、さらなる軍事要塞化が急ピッチで進められています。その実態とそこに至るまでの過去を、多くの戦跡や資料から学び、平和について今一度考える機会としました。

1日目【現在の沖縄】～基地負担の実態～

○ 道の駅かでな（嘉手納基地）・嘉数高台公園（普天間基地）

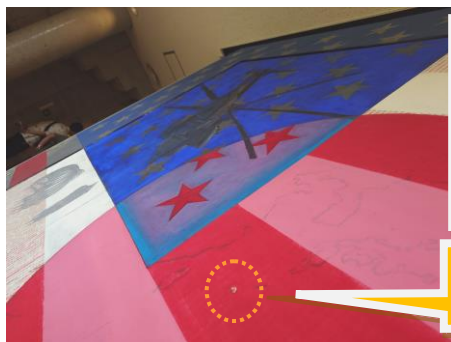


米軍機の爆音を体感。窓を開けた地下鉄車内と同程度の騒音(90dB)が何度も…

住宅街に囲まれた普天間基地。「世界一危険な基地」と言われる理由が一目でわかる。



○ 佐喜真美術館（「沖縄戦の絵」）



普天間基地の一部を取り戻して建てられたため、3方をフェンスに囲われている。アートから沖縄戦の悲惨さと基地問題の本質を学ぶ。

沖縄に見立てた琉球石灰岩。それを取り巻くのは…



○ 不屈館



戦後沖縄の祖国復帰と平和な社会の実現をめざして「不屈」に闘った瀬長亀次郎（元衆議院議員）。今に至る沖縄県民の闘いの歴史から、団結して声を上げ続ける重要性を学んだ。





～戮力協心～ NO.36 その2

2024年6月6日
発行責任者 池尻 和寛
編集責任者 情 宣 部

復帰52年！5.15沖縄平和研修

2日目【沖縄戦の実相①】～ひめゆり学徒隊がたどった南部戦跡～

○ 南風原文化センター（沖縄陸軍病院南風原壕群20号）



地上戦に備え、陸軍病院の近くに掘られた壕。1945年3月24日ひめゆり学徒222名は看護補助要員として動員、負傷兵の看護にあたった。

炊事場から壕までの数百メートルを結ぶ「飯上げの道」。砲弾が雨のように降りしき中、少女二人でご飯の入った桶を担ぎ、この悪路を走った。



○ 糸数アブチラガマ



周辺住民の指定避難場所や日本軍の地下陣地・倉庫として使用されていたが、日本軍は住民をガマの奥まで入れず、出入り口付近に留めた。戦線が南下すると南風原陸軍病院の分院となり、5月1日からひめゆり学徒も配属された。

5月25日
南部へ撤退命令！

6月18日
学徒隊「解散命令」！



ひめゆり学徒の犠牲者が最も多かった伊原第三外科壕跡にある「ひめゆりの塔」

○ ひめゆりの塔・ひめゆり平和祈念資料館

南部に撤退するも医薬品不足でまともな治療はできず、避難した壕は陸からも海からも米軍の攻撃を受ける。解散命令が出されたひめゆり学徒は砲弾が降りしきる外へと追いやられてしまう。

○ 荒崎海岸・魂魄の塔



海岸まで逃げるも水平線が見えないほどの米軍艦隊が艦砲射撃をしてくる。ある者は銃弾に倒れ、ある者は防風林に身を潜め、ある者は仲間と共に手榴弾で自決した。

戦後、開墾に影響が出るほど多くの遺骨が放置されていたことから、その遺骨(3万5千余柱)を1か所に集め、「魂魄の塔」に納めた。



○ 平和祈念公園（平和の礎・沖縄平和祈念資料館）



1974年、政府の意向により魂魄の塔の遺骨は現在の平和祈念公園にある戦没者中央納骨所へ移された。魂魄の塔には、その際に開けられた穴の跡を見ることができる。

沖縄戦の戦没者全員の氏名が刻まれる「平和の礎」。敵味方関係なく、その数は24万人を超え、新たに判明した戦没者の名前も追記されている。



～戮力協心～ NO.36 その3

2024年6月6日
発行責任者 池尻 和寛
編集責任者 情 宣 部

復帰52年！5. 15沖縄平和研修

3日目【沖縄戦の実相②】～戦争の本質とは～

○ 対馬丸記念館

戦局の悪化にともない、本土決戦が迫りつつあると見た政府は1944年、沖縄県に対して「老人や婦女、児童計10万人を本土へ疎開させよ」と命令を出した。同年8月21日、学童1661名を乗せた対馬丸は九州をめざして那覇港を出港、しかし翌22日22時過ぎ、米潜水艦の魚雷攻撃によって撃沈された。784名の学童を含む1500人以上が亡くなった。政府は、この事実が広まると疎開が進まず、戦闘に不利になることを恐れ、対馬丸沈没の事実を隠し、生存者には厳しい「緘口令(かんこうれい)」が敷かれました。



○ 旧海軍司令部

旧海軍の指令拠点として、小禄飛行場(現;那覇空港)を見渡せる場所に建設された防空壕。掘り抜いた横穴をコンクリートや漆喰、坑木で固め、艦砲射撃にも耐える地下陣地に、4,000人の兵が収容されました。建設の際は、司令部の位置が米軍にばれることを防ぐため、軍人だけで建設された。完成後も民間人が立ち入ることはできなかった。



米軍の猛攻により海軍部隊は追い詰められ、太田司令官はじめ幹部6名は、1945年6月13日夜、拳銃と手榴弾によって自決した。幕僚室跡の壁には、自決した時の破片の跡を見ることができる。



戦争が始まれば、軍は民間人を守る余裕などありません。物資も食料も避難場所さえ軍が優先され、民間人は誰に守られるでもなく、ただ戦場に放り出されて命を落としてしまうのです。そうした経験があったからこそ、戦後沖縄では平和な社会の実現にむけ、多くの人々が声をあげてきました。しかし、現在そういった民意は、国防・国益のもとに無視され、沖縄を再び戦場にしようとしています。

3日間の研修を通じて、先の戦争で沖縄の人々が感じた恐怖と今の沖縄の人々が抱く平和への思いの強さを、見て、聞いて、感じることができました。

「命どう宝」(命は最高の宝である)!

どんな理由があれ、戦争は阻止しなければなりません。「新たな戦前」をむかえている今だからこそ、研修で得た学びを全国の仲間に展開し、更なる平和運動を展開していきます!!

JR貨物労組青年部

